

万葉集概説

北川 和秀

1. 万葉集とは

- ① 奈良時代後半に編纂されたわが国現存最古の和歌集。
- ② 全部で4500首あまりの和歌を収める。全二十巻。
- ③ 歌の作歌年代は130年間ほど。これを四期に分けて考える。
- ④ 歌の作者は、天皇、貴族から一般庶民まで幅広い。
- ⑤ 作者の出身地は近畿地方が多いが、東歌や防人歌など東国農民の歌も収められている。
- ⑥ 平城遷都からほど遠からぬ頃に飛鳥時代の部分が編纂され、以後、増補が繰り返されて、現在見る形になったと考えられる。
- ⑦ 最終的な編者は大伴家持か。
- ⑧ 歌は、基本的に、雑歌、相聞、挽歌という三つの分類のもとに配列されている。この分類を部立（ぶだて）という。
- ⑨ 相聞は恋の歌、挽歌は死にまつわる歌、雑歌はその他。ただし、初期万葉の頃の雑歌は宮廷の儀礼歌が多い。時代が降ると雑歌には様々な歌が増えてゆく。
- ⑩ 当時はまだひらがなもカタカナも発明されていなかったので、歌は漢字のみで表記されている。
- ⑪ 表記に当たっては、「春」^{はる}「山」^{やま}「恋」^{こひ}などのように、漢字の意味を生かした用法と、「波流」^{はる}「也麻」^{やま}「古非」^{こひ}などのように、漢字の発音（音または訓）だけを借りた用法とがある。漢字の発音だけを借りた用字を万葉仮名という。
- ⑫ 万葉集の原本は今に伝わらないが、部分的ながらも平安時代の写本が数点伝来している。
- ⑬ 全巻揃った写本は鎌倉時代後期のものが最も古い。
- ⑭ 明治時代に『国歌大観』が編纂されたときに、万葉集の全ての歌に番号がつけられた。その番号が今でも「万葉集の歌番号」として用いられている。

2. 各期の特徴

代表歌人	歌の特徴	時代的背景	期間	
舒明天皇 有間皇子 天智天皇 額田王	<ul style="list-style-type: none"> ・古代歌謡から和歌へ ・口承的、呪的性 格、集団性 ・歌体が五七の定型に落ちつく ・格調高い歌が多い 	<ul style="list-style-type: none"> ・蘇我氏の時代から、大化改新を経て中大兄の時代へ ・白村江の大敗、大津京遷都もあり、激動の時代 	舒明天皇く 壬申の乱672	第一期
柿本人麻呂 高市黒人 持統天皇 大津皇子 大伯皇女 志貴皇子	<ul style="list-style-type: none"> ・口承から記載へ ・専門歌人が出現 ・題材が拡大 ・長歌が著しく発展 ・定型化が進む 	<ul style="list-style-type: none"> ・壬申の乱後の安定した時代 ・天武天皇のもと強力な中央集権の国家が作られた 	壬申の乱く 平城遷都710	第二期
大伴旅人 山上憶良 山部赤人 笠金村 高橋虫麻呂 大伴坂上郎女	<ul style="list-style-type: none"> ・個性が開花した時代 ・歌人層が飛躍的に拡大し、歌のテーマも多様化 ・漢詩文や仏典の影響が見られる歌もある 	<ul style="list-style-type: none"> ・律令制が確立する時代 ・記紀が成立し、風土記撰進の詔が出るなど、文化的な事業も活発であった 	平城遷都く 天平五年733頃	第三期
大伴家持 笠郎女 狭野弟上娘子 中臣宅守 田辺福麻呂 遣新羅使人たち	<ul style="list-style-type: none"> ・長歌は衰退し、類型的になる ・歌が社交の道具ともなる ・繊細優美、理的・技巧的な歌が増える 	<ul style="list-style-type: none"> ・天平文化の花開いた時代 ・律令制は早くもほころびを見せ始める 	天平五年頃く 天平宝字二年759	第四期

* 磐姫皇后（巻二巻頭歌）や雄略天皇（巻一卷頭歌）などは第一期には含まない。

* 他に、東歌・防人歌

3. 各巻の構成

①巻一・巻二が万葉集の最も古い段階と考えられる。この二巻には天皇の代毎に歌をまとめるという特徴がある。また、巻一は雑歌、巻二は相聞・挽歌の部立を持つので、この二巻セットで三大部立が揃う。本来一体のものであるのを、分量の点で二巻に分割したのであろう。歌の時代的な範囲は、平城遷都まで。一部、増補のような形で平城遷都後の歌を含む。

②巻三・巻四は、巻一・巻二の補遺と追加。

③巻五は、大伴旅人・山上憶良を中心に、九州でよまれた歌を集めたもの。天平初年の六年間ほどの期間に限られる。歌の前に漢文の序を伴うものがあるが、それはほぼ巻五のみの特徴。

④巻六は、巻三の雑歌の補遺と追加。ここまでの諸巻は基本的に作者名を記す。

⑤巻七は作者不明の歌を集めた巻。

⑥巻八・巻一〇は四季分類の巻。巻八は作者名を記す。巻一〇は作者不明の歌。

⑦巻九は、万葉集以前に編纂されていた歌集から歌を収める。

⑧巻一一・巻一二は作者不明の相聞を集めた巻。歌によまれた地名から、近畿地方の歌と考えられる。

⑨巻一三は長歌を収めた巻。

⑩巻一四は東歌を収めた巻。

⑪巻一五は二つだけの歌群から成る。前半は遣新羅使人の歌、後半は狭野弟上娘子と中臣宅守の贈答歌。

⑫巻一六は雑纂的な巻。物語を伴う歌やユーモラスな歌などがある。巻一六までの諸巻の歌の時代は天平十六年以前なので、天平十六年をあまり降らない時期に巻十六までがまとめられたか。

⑬巻一七く巻二〇は部立がなく、歌が年月日順に排列されている。大伴家持の歌が極めて多く、家持以外の作者の歌も、家持と歌をやり取りした作歌や、家持も同席した宴席でうたわれたものが多い。そういったことから、これら四巻は家持の歌日記のようなものが土台になっていると考えられる。

⑭巻一六までがまとめられた後に巻一七以降が追加されて、全二十巻になったのである。

万葉集各巻一覽

卷十一	卷十	卷九	卷八	卷七	卷六	卷五	卷四	卷三	卷二	卷一	卷
問答 寄物陳思 正述心緒 旋頭歌	冬相聞 冬相聞 秋相聞 秋相聞 夏相聞 夏相聞 春相聞 春相聞	挽歌 相聞歌 雜歌	冬相聞 冬相聞 秋相聞 秋相聞 夏相聞 夏相聞 春相聞 春相聞	挽歌 譬喻歌 雜歌	雜歌	雜歌	相聞	挽歌 譬喻歌 雜歌	挽歌 相聞	雜歌	部立
	年代不明(二期～四期か)	(一期)～天平一六年頃	一期～天平一五年頃	年代不明(二期～四期か)	養老七年～天平一六年頃	神龜五年～天平五年	(仁徳)～天平一六年頃	紀皇女・天平期 聖徳太子～天平一六年 持統～天平五年頃	齊明～元正 (仁徳)天智～持統	(雄略)舒明～元明	時代
	作者不明 (人麻呂歌集あり)	記名・歌集歌 (人麻呂歌集あり)	記名	作者不明 (人麻呂歌集あり)	記名	記名	記名	記名	記名	記名	作者名
	正訓字主体	正訓字主体	正訓字主体	正訓字主体	正訓字主体	音仮名主体	正訓字主体	正訓字主体	正訓字主体	正訓字主体	表記

卷二十	卷十九	卷十八	卷十七	卷十六	卷十五	卷十四	卷十三	卷十二	卷十一	
なし	なし	なし	なし	有由縁 并雑歌	なし	挽歌 譬喻歌 防人歌 相聞歌 雑歌	東歌 相聞歌 譬喻歌	問答 譬喻歌 挽歌	問答 悲別歌 羈旅発思 寄物陳思 正述心緒	正述心緒 寄物陳思 問答 譬喻
勝宝五年五月～宝字三年正月	勝宝二年三月～五年二月	天平二〇年三月～勝宝二年二月	天平一八年正月～二〇年春	天平二年～一六年四月	天平一一年頃	天平八年・九年	年代不明(二期・三期か)	年代不明(二期・三期か)	年代不明(二期～四期か)	年代不明(二期～四期か)
記名	記名	記名	記名	記名	中臣宅守・弟上娘子	遣新羅使人等	作者不明 (国名不明)	作者不明 (国名判明)	作者不明 (人麻呂歌集あり)	作者不明 (人麻呂歌集あり)
音仮名主体	正訓字主体	音仮名主体	音仮名主体	正訓字主体	音仮名主体	音仮名主体	正訓字主体	正訓字主体	正訓字主体	正訓字主体